

国

語

(解答番号)

1

}

35

()

国 語

試験時間60分

〔注 意〕

1. この問題冊子は指示があるまで開いてはいけない。
2. 受験番号が正しく記入・マークされていない場合は0点となる。
3. 解答はすべて解答用紙の所定欄にマークすること。例えば、問題文中に

10

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように
解答番号10の解答記入欄の③にマークすること。正しくマークされていない
 場合は採点できないことがある。

(例)

解答 番号	解答記入欄 (マーク)									
10	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

4. 問題冊子の各ページの余白は自由に使用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 試験終了後、解答用紙は通路側に置くこと。なお、問題冊子は持ち帰ること。

〈マーク式についての注意〉

1. 機械が読み取って採点するので、折り曲げたり汚したりしないこと。
2. マークはHBの鉛筆で枠の中を濃く塗りつぶすこと。
3. 1つのマーク欄には1つしかマークしないこと。
4. 訂正はプラスチック消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除くこと。
5. 所定欄以外には何も書かないこと。

問題一 次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

何を今ごろと言われそうだが、いわゆる若者言葉で、ヤバイという言葉の意味を聞いたときは正直驚いた。私たちが使ってきたニュアンスとはまったく逆。「あの試験どうもヤバイなあ」と言えば、落っこちそうだったことだったはず。いつの間にか「このコーヒー、めっちゃヤバイ」が、すごく旨いというニュアンスになっていた。

言葉が時代とともに変わっていくのはやむをえないことであり、とどめようもないところがある。いまとなつては「ら抜き言葉」の是非を、云々すること自体、どこか間が抜けていると感じるほどに、わずか20年ほどのあいだに「ら抜き言葉」が一般化してしまった。

私自身はいまはかない抵抗を続けていて、どうしても「見れる」とか「食べれる」などの「ら抜き言葉」は使えないし、使うつもりもないが、若者たちの「ヤバイ」には、それとは違った違和感と危惧を抱いている。「ヤバイ」が「旨い」「おもしろい」「かっこいい」「素敵だ」「気持ちいい」など、ほんらいかなりニュアンスの違った感覚、感情をすべてひっくるめて一語で代弁してしまうというところにまず引かかる。

ある感動を表現するとき、たとえば「good」一語で済ませてしまうのではなく、そこにニュアンスの異なったさまざまな表現があること自体が、文化なのである。「旨い」にしても、「おいしい」「まろやかだ」「コクがある」「とろけるようだ」などなど、どのように「旨い」かを表わすために、私たちの先人はさまざまに表現を工夫してきた。それが文化であり、民族の豊かさである。

いつも、もってまわった高級な表現を使えというのではまったくないが、必要に応じて、自分自身が持ったはずの「感じ」を自分自身の言葉で表現する、そんな機会は、人生において必ず訪れるはずである。そんなときのために、私たちは普段は使わなくともさまざまな語彙を用意しているのである。語彙は自然に増えるものではなく、読書をはじめとするさまざまな経験のなかで培われていくものである。ひよっとしたら一生に一度しか使わないかもしれないけれど、それを覚悟で一つの語彙を

自分のなかに溜め込んでおくことが、生活の豊かさでもあるはずなのだ。

すべてが「ヤバイ」という符牒で済んでしまう世界は、便利で効率がいいかもしれないが、その便利さに慣れていつてしまふことは、実は、きわめて薄い文化的土壌のうえに種々の種を蒔くことに等しいのであるかもしれない。

「ヤバイ」は多くの形容詞の凝縮体であると考えることができる。「ヤバイ」一語で済ませるのではなく、それを自分の側からもっと細かいニュアンスを含めた表現によって深めたいという話をしてきた。

しかし、先にあげたさまざまな状態や感情を表わす言葉は、それでも一般的な、最大公約数的な意味を担った形容詞なのである。必ずしも、その人独自の表現というわけではなく、誰にも通用する表現法であることから、「ヤバイ」とそんなに違ったものではないという イ も可能である。

話が飛躍するようだが、近代の歌人に島木赤彦がいる。彼はアララギ派の歌人であり、アララギは「写生」をその作歌理念に掲げていた。なぜ写生が必要なのか。赤彦は『歌道小見』という入門書の中で、「悲しいと言え甲にも通じ乙にも通じます。しかし、決して甲の特殊な悲しみをも、乙の特殊な悲しみをも現しません。歌に写生の必要なのは、ここから生じて来ます」と述べる。

短歌は、自分がどのように感じたのかを表現する詩形式である。歌を作りはじめたばかりの人の歌には、悲しい、嬉しいと形容詞で、自分の気持ちを表わそうとするものが圧倒的に多い。作者は「悲しい」と言うことで、自分の感情を表現できたように思うのであるが、これでは作者が「どのように」悲しい、うれしいと思ったのが一向に伝わってこない。赤彦の言う作者の「特殊な」悲しみが伝わることはない。形容詞も一種の出来合いの符牒なのである。

斎藤茂吉は島木赤彦と同時期に「アララギ」を率いた近代短歌の キョシヨウ であるが、彼に、母の死を詠んだ一連がある。歌集「ロ」中の「死にたまふ母」一連である。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる
のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

誰もが知っている歌であろう。一首目は「死に近き母」をはるばる陸奥の実家に見舞い、添い寝をしている場面である。普段は気にもならない蛙の声が天にも届くかと思われるほどに聞こえてくる。決して騒がしい声ではなく、しんと天にも地にも沁みいるような声である。一首が言っているのはそれだけのこと、まことに単純な事実だけを詠っている。二首目も、母がもう死のうとしている枕元、ふと見上げると喉の赤い燕が二羽、梁に留まっていた。ただそれだけである。

ここには「悲しい」とか「寂しい」とか、そのような茂吉の心情を表わす言葉は何一つ使われていないことに注意して欲しい。にもかかわらず、私たちはそのような形容詞で表わされる以上の、茂吉の深い内面の悲しみを感受することができる。考えてみれば不思議な精神作用である。文章の上では何も言われていない作者の感情を、読者はほとんど何の無理もなく感受することができているのである。

もしこれらの歌のなかに、茂吉の感情として「悲し」「寂し」などの形容詞が入っていたとするならば、一般的な感情としては理解できるが、それだけではけっしてその時の茂吉の悲しさ、寂しさを表現したものにはならないだろう。悲しい、寂しいという最大公約数的な感情の表現でしかないからである。「決して甲の特殊な悲しみをも、乙の特殊な悲しみをも現しません」と赤彦の言う通りである。

短歌では、作者のもっとも言いたいことは取って言わないで、その言いたいことをこそ読者に感じ取ってもらおう。単純化して言えば、短詩型文学の本質がここにあると私は思っている。

これはかなり高度な感情の伝達に関する例であるが、私たちは自分の思い、感じたこと、思想などを表現するのに、できるだけ〈出来あいの言葉〉を使わずに、自分の言葉によって、自分の思いを、人に伝える。この大切さをもう一度確認しておきたいものだと思う。

ヤバイ、カワイイだけで通用していた社会は、すぐに卒業ということになり、いよいよ実社会へ出ることになる。就職という課題が目の前にちらつきだすと、②トタンに言葉遣いが変わってくる。「オンシャ」などと言い慣れない言葉が飛び出すようになるのを見ているのは痛々しいことだ。

これもマニュアルなのだろうが、もし私が会社側の面接官だったら、「オンシャ」などという出来あいのマニュアル通りの言葉を使うような若者は、イの一番に刎ねてしまおうと思うのだが、どうだろう。(f)すでにできている言葉の世界で、みんなが使う言葉でしか自分を表現できない若者に、いったい独創性とか個性とかを期待できるものなのだろうか。

(永田和宏「知の体力」による。一部改変)

問一 傍線部(1)、(2)の片仮名に該当する二つの漢字と同じ漢字を使うものとして最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。

- | | | | |
|---|------------------------|---|-------------------|
| <p>(1) 1</p> <p>① 文壇のキョセイ墜つ</p> <p>② 委員長にスイキヨする</p> <p>③ 坂本龍馬のグウキヨ跡</p> <p>④ キョレイ廃止の方針</p> | <p>1</p> <p>キヨ ショウ</p> | <p>(2) 2</p> <p>① ショウスイした様子</p> <p>② 体力をショウモウする</p> <p>③ 宮大工のメイショウ</p> <p>④ 権力をショウウアクする</p> | <p>1</p> <p>4</p> |
| <p>(2) 3</p> <p>① 病院で飲酒は御ハット</p> <p>② トテイ制度を継承する</p> <p>③ 苦しい心情をトロする</p> <p>④ ゼント洋洋たる将来</p> | <p>ト タン</p> | <p>4</p> <p>① カンタンの声を上げる</p> <p>② 事件のホッタン</p> <p>③ 精神のタンレン</p> <p>④ ゴウタンな若者</p> | |

問二 波線部 (a) に相当する言葉を含む文例として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

5

- ① 万が一電車に乗り遅れても、線路沿いの道を歩けば隣町までは行ける。
- ② 庭に生い茂る雑草を短時間で刈るには、性能の高い電動草刈機を手に入ればよい。
- ③ 風雨にさらされた看板の文字が、月明かりの下で辛うじて読める程度だった。
- ④ 前夜にくっすり寝れたので、朝食時に食欲が湧いて十分な栄養を摂れた。
- ⑤ 山小屋で美味しいコーヒーが飲めれるならと、彼女は奮起して登頂を目指した。

問三 波線部 (b) の用例として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

6

- ① 同じ文言を繰り返さねばならないので、以下を云々することにした。
- ② 独りでは難しい大工仕事を、父に云々するよう頼んだことで楽に完成した。
- ③ 安易に云々する人は、大事業を成し遂げる人物までには大成しない。
- ④ 他人よりも云々する彼の性格は、その母譲りの楽観主義にある。
- ⑤ 緊急事態において、所轄の許可の有無を云々する暇はない。

問四 筆者が波線部 (c) を抱く理由を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

7

- ① 「ら抜き言葉」はすでに一般化しているが、「ヤバイ」を使用するのはまだおもに若者だけだから。
- ② 「ら抜き言葉」は以前にはなかった言葉で筆者はこれを使わないが、「ヤバイ」は昔からある言葉で筆者も使っていたから。
- ③ 本来さまざまな意味合いの異なる感覚や感情を、若者言葉の「ヤバイ」は一語にまとめているから。
- ④ 「旨い」「おもしろい」「かっこいい」「素敵だ」「気持ちいい」という意味で、「ヤバイ」を使うのには抵抗を感じるから。
- ⑤ 筆者の世代では「ヤバイ」を否定的な意味でのみ使ったが、現代の若者は肯定的な意味でも使うから。

問五

波線部（d）と、たとえる状況になった結果、筆者が危惧する内容を具体的に説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

8

- ① 「ヤバイ」のように一語であらゆる意味を表現できる、便利で効率のいい言葉を使い慣れることによって、一生に一度しか使わないような言葉が忘れられてしまう。
- ② それぞれに細やかに異なる感情や状態をさまざまな言葉で表現する文化が失われ、生活の豊かさ、ひいては民族の豊かさも失われる。
- ③ 一生に一度しか使わないような言葉を、人々が読書などを通して語彙として獲得する努力をしなくなってしまう。
- ④ 「ヤバイ」がすべての形容詞の凝縮体となり、最大公約数的な意味を獲得し、細かいニュアンスを含んだ表現が廃れてしまう。
- ⑤ 最大公約数的な意味を担う形容詞が使われなくなり、私たちが状態や感情を表現することや、それを他者が理解することが困難になってしまう。

問六

空所イに入る語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

9

- ① 結論
- ② 推論
- ③ 極論
- ④ 反論
- ⑤ 概論

問七

空所ロに入る作品名として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

10

- ① 赤光
- ② 桐の花
- ③ 若菜集
- ④ 一握の砂
- ⑤ みだれ髪

問八

波線部（e）の理由を、筆者の考えに沿って説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

11

- ① 天にも届くかと思われるほどの蛙の音が聞こえてくることや、喉の赤い燕が二羽、梁に留まっていたといった、単純な事実だけを淡々と詠んでいるから。
- ② 斉藤茂吉は島木赤彦と同時期の「アララギ」派の歌人で、その派の歌人たちは「写生」を作歌理念に掲げており、茂吉の短歌はまさにその理念に貫かれていた作品だから。
- ③ 斉藤茂吉は近代短歌の代表的な歌人で、その母の死を詠んだ一連の哀傷歌は、彼の代表作として国語の教科書にも載るほど誰もが知っている有名な歌だから。
- ④ 斉藤茂吉の歌には、最大公約数的な感情の表現を使って徹底した「写生」をすることによって、島木赤彦という作者の「特殊な」悲しみが表現されているから。
- ⑤ 直接的な表現を敢えて使わずに作者のいいたいことを読者に感じとらせるという短歌の本質を、私たちが理解し、それを民族の文化として培ってきたから。

問九 波線部 (f) を具体的に指す説明として適切でないものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

12

- ① すべてが「ヤバイ」という符牒で済んでしまう世界
- ② 最大公約数的な形容詞を使って高度な感情の伝達をする世界
- ③ マニユアル通りの言葉を使えば通用する世界
- ④ 「悲しい」とか「寂しい」といった心情を表す言葉で通じる世界
- ⑤ 島木赤彦がいう「悲しいと言えば甲にも乙にも通じる」世界

問十

本文の趣旨として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

13

- ① 最大公約数的な意味を担った言葉を駆使して状態や感情を表現することで、私たちは自分の思いを他者に伝え、また他者の思いを理解するという相互理解が可能になる。
- ② 自分自身が抱いた感情を自分自身の言葉で表現する機会は誰にでも訪れる。そんなときのために、一生に一度しか使わないかもしれない言葉も含めて、さまざまな語彙を経験のなかで溜め込んできた若者にこそ、独創性や個性を期待できる。
- ③ 短歌は自身の感情を表現する詩形式であるが、その感情を誰にでも通用する形容詞では取って表現せずに、作者の「特殊な」感情を読者に感受させるところにその本質がある。
- ④ 先人たちがさまざまに表現を工夫してきた日本語文化の豊かさを継承するためには、出来合いの言葉を使わずに、自分の言葉によって自分の思いを人に伝えることの大切さを、あらためて認識すべきである。
- ⑤ 言葉は時とともに変化するものであり、「ら抜き言葉」や広汎な意味を担う「ヤバイ」などの若者言葉の出現を阻止することはできないが、これらの言葉を安易に受け入れることに、教養ある大人は警鐘を鳴らし続きけるべきである。

問題二 次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

メディアリテラシー教育論が イ に見えるのは、それが市民新聞——マス・ペーパーの大衆新聞の対義語——の黄金時代に活躍したデュイの思想的系譜に連なるためでもあろう。人間の自覚性を重視するデュイの教育論は、わかりやすく言えば市民新聞の読者層、あるいは教養市民層の教育論である。だが、現在のメディアリテラシーの困難性は、そうした a 市民新聞（高級新聞）の読者モデルが一般化できるメディア環境ではなくなったことではないだろうか。その点ではSNS普及の影響が大きい。SNSは個人の情報発信力を飛躍的に高めるとともに、レコメンデーション（推奨）システムで大量のパーソナライズされたフィルターバブルの情報伝達を可能にしている。

いま現在も五〇代以上の教師（新聞読者）と一〇代の生徒（ネットユーザー）の間で、メディア環境に対する認識ギャップは急速に拡大している。b「学校はいつも遅れてしまう」と、リップマンが一〇〇年前に発した言葉はますます有効なのだ。年配の教師がまだ学生だった一九九〇年代に接した初期インターネットでは「c」トクシ的なモチベーションに基づいたコンテンツ発信」が中心であり、その主要な担い手は一般大衆ではなく ロ だった。その当時、ユルゲン・ハーバーマスの市民的公共性論をベースに電腦公共性を語ることが流行していたのもそのためだ。たとえば一九九六年に刊行された公文俊平編著「ネティズンの時代」では、ネットワーク・シティズンが「智民」と訳出されていた。デジタル空間が ハ に開放された今日でも「智民」はメディアリテラシー教育の達成目標かもしれないが、さすがに「ちみん」を口にする人はもういない。フェイクニュースに飛びつき、2 インボウ論を拡散する「痴民」に文字変換される可能性が高いからである。

そもそも、サイバーシティズン（電腦市民）がどれほどクリティカルシンキング（吟味思考）をマスターしたところで、情報の真偽がそう簡単に見分けられると考えるべきではない。

ゆる領域で情報の真偽を見分ける能力など、たとえ情報分析のプロフェッショナルであっても個人的には持ち合わせていない。だとすれば、フェイクニュースなどへの対応策として一般の人びとに求めるべきは積極的（ポジティブ）なメディアリテラ

I

あら

シーだけでよいだろうか。むしろ、情報源を検討する判断基準として「ソ・ウ・カ・ナ」1 即断しない・鵜呑みにしない・偏らない・中だけ見ない」や「だ・い・じ・か・な」2 誰・いつ・事実・関係・なぜ」を生徒に教えることは必要だ。しかし、それでも見分けがつかない「あいまい情報」に直面した際に、どう対応すべきか、それこそが問われるべきではないだろうか。

そのとき多くの教師は「より広くより深いクリティカルシンキング」を生徒に求めるのかもしれない。しかし、それは誰にでも、できることではない。リップマンの時代より情報量が爆発的に増大した今日、ますます不可能な要求である。そのために受け入れる情報を減量する「デジタル・ダイエット」が提唱されるわけだが、食事制限の継続が誰にもできないからこそ、ダイエット産業は不滅なのではないか。

さらに言えば、私たちが情報に接するのはテストを受ける教室ではなく、快適に過ごす日常空間であることが圧倒的に多いはずだ。そうした空間で私たちが求めるのは、認知的な不協和を生まない心地よい情報である。その状況で私たちは「ソ・ウ・カ・ナ」3「だ・い・じ・か・な」とファクトチェックをするだろうか。少なくとも私にはできそうもない。

こうした現状を考えた上で、私は前著「流言のメディア史」を次の言葉で結んでいる。

マスメディアの責任をただ追及していればよかった安楽な「読み」の時代はすでに終わり、一人ひとりが情報発信の責任を引き受ける「読み書き」の時代となっている。こうした現代のメディア・リテラシーの本質とは、あいまい情報に耐える力である。この情報は間違っているかもしれないというあいまいな状況で思考を停止せず、それに耐えて最善を尽くすことは人間にしかできないことだからである。

この「ニ 力」への期待は、情報の真偽を見分けることが容易ではない、いや、ほとんど不可能なあいまい情報への向き合い方から生まれた。そして、私たちに必要なのはAIが得意とするあいまい情報に対するリテラシーである。その場合、むしろ、消極的（ネガティブ）な視点でメディアリテラシーを考えるべきではないのか。

（佐藤卓己「あいまいさに耐える——ネガティブ・リテラシーのすすめ」による）

問一 傍線部(1)、(2)の片仮名に該当する二つの漢字と同じ漢字を使うものとして最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。

14

17

(1)

14

① 彼女はトクボウ高く信頼されている

② トクメイでの掲載を希望する

③ 祖父がキトクとの知らせが入った

④ トクヒツすべきことはない

トク
シ

15

① 動乱の時代にもリッシン^{リッピン}の精神を失わない② 環境保護のためのシサク^{シヤク}が必要だ③ シセイ^{セイ}の人々の声に耳を傾ける政治家④ 海外にシセツ団^{シヤツダン}を派遣する

(2)

16

① 契約文書には正式なインショウ^{インショウ}が押される② インエイ^{インエイ}の描写が巧みな絵画③ 相手のインギン^{インギン}無礼な態度④ 響きのよいオウイン^{オウイン}が魅力の詩イン
ボウ

17

① 専制君主によるボウセイ^{ボウセイ}に苦しめられる② 巧妙なケイボウ^{ケイボウ}によって相手を出し抜く③ 裁判をボウチヨウ^{ボウチヨウ}する④ 国家のソンボウ^{ソンボウ}をかけた戦い

問二 空所イ～ニに入る語句として最も適切なものの組合せを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

18

- | | | | |
|---------|--------|------|--------|
| ① イ 悲観的 | ロ エリート | ハ 大衆 | ニ 決断する |
| ② イ 楽観的 | ロ 専門家 | ハ 大衆 | ニ 耐える |
| ③ イ 否定的 | ロ 専門家 | ハ 公衆 | ニ 決断する |
| ④ イ 希望的 | ロ エリート | ハ 公共 | ニ 決断する |
| ⑤ イ 楽天的 | ロ 教育者 | ハ 公衆 | ニ 耐える |

問三 波線部(a)の具体的な説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

19

- ① デジタルメディアが発展しておらず、情報伝達が大量新聞という媒体にのみ依存した環境。
- ② 読者それぞれの特性や嗜好に合わせ、最適化された情報のみが選別されて伝わる環境。
- ③ 読者が自発的に判断することで、多様な発信者がもたらす情報への取捨選択が正しく行われる環境。
- ④ 限られた情報にしかアクセスできないため、読者の知識に偏りが生じる環境。
- ⑤ 情報の発信者が限定されており、同時に読者層の教養レベルが一定以上担保された環境。

問四

波線部（b）の具体的な説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

20

- ① 生徒はもはや自発的に情報を取得しているため、生徒へ学びを提供する機関としての学校の立場が脅かされているということ。
- ② 学校や教師が常に正しいとは限らず、ときには生徒によって何らかの学びがもたらされる瞬間も存在するということ。
- ③ 教師と生徒のジェネレーションギャップにより、学校は生徒を取り巻くメディア環境の実態に即した学びを提供できないということ。
- ④ 学校教育はいまだに市民新聞の黄金時代を規範としており、デジタルメディアが発展した現代には適さないということ。
- ⑤ 教師による思い込みによって、生徒との間に認知のギャップが生じ、誤った学びが提供される場合もあるということ。

問五

空所Ⅰに入る文として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

21

- ① 私たちが何かの専門家になるということは、別の何かの専門家ではないということを意味する。
- ② クリティカルシンキングによって、情報の真偽を判断することは到底できるものではない。
- ③ 意図的に発信された偽りの情報は、もはや真実を凌駕するほどの影響力をもつ。
- ④ 情報を疑えば疑うほどに人間の思考は混乱し、その結果、偽りの情報を受け入れてしまう。
- ⑤ これは情報分析のプロフェッショナルのみがもつ特別な能力であり、一朝一夕で習得はできない。

問六

波線部（c）を具体的に説明したものととして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

22

- ① 疑わしい情報は、拡散する以前にまず否定的な観点から見つめ直し、自力で正確性を補う必要があるということ。
- ② 真偽不明の情報に直面した際は、安易に拡散せず、一定の疑いをもったまま静観するべきであるということ。
- ③ 現代社会を生きる人間には、情報を鵜呑みにせず、根拠を調べ、事実を検証する能力が必要であるということ。
- ④ 自分にとってマイナスな情報に直面しても、冷静さを失うことなく客観的な視点から答えを導き出すべきであるということ。
- ⑤ デジタルメディアは便利な一方で、フェイク情報も多く含むため、情報を正しく取捨選択すべきだということ。

問七

筆者の主張として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

23

- ① 市民新聞の時代には誰もが身につけていたメディアリテラシーは、デジタルメディアの発展とともに徐々に失われつつある。このことから、現代の教育には限界があることが逆説的に露見しており、学校は変革を迫られている。
- ② 「読み書き」の時代である現代では、情報発信の責任はマスメディアから各人へと移っている。情報を発信する以上は、その真偽について自分なりの根拠をもち、発信を通じて受け手を啓蒙するという意識をもつことが不可欠である。
- ③ 膨大な情報が溢れかえる現代では、たとえ情報分析の専門家であったとしても、ほとんどの情報に対してはまったくの無知であるに等しい。自身の知識に奢ることなく、無知の領域についても積極的に知識を蓄えていくことの必要性が叫ばれている。
- ④ すべての情報に対して正しく真偽を判定することは、およそ不可能である。SNS全盛の現代を生きる人々には、クリティカルシンキングに基づき情報の真偽を見極める力よりも、むしろ真偽の程が定かでない情報について結論を急がない姿勢が必要である。
- ⑤ 情報とは、いかなる場合も有用なものであるとは言えず、ときにはネガティブな効果をもたらすものも含まれる。受け入れる情報量に一定の制限を設けたうえで、自らの力で選び取ることができる「智民」としての思考態度が現代人には求められる。

問題三

次の各問に答えなさい。

問一

文意が一通りに限定されるものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。

24

- ① 改めて先週訪れたその店の印象を日記に書いてみようと思った。
- ② 彼は黙ってただ立ち尽くしている友人を見ていた。
- ③ 兄はどうしても父と母の大好きな店に行ってみたかったのだ。
- ④ 私は彼のように周りの評判を気にすることなく発言できるようになりたい。
- ⑤ 両選手の白熱した攻防戦に息子はテレビの前から離れられなくなった。

問二

(1)～(3)の文の【 】に入る語句として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。

25

27

- (1) 彼はすべての仕事をやり終えてしまったので、ただ一人【 】様子で天井を見つめていた。
 - ① 折り目正しい
 - ② かいがいしい
 - ③ あられもない
 - ④ かしましい
 - ⑤ 所在ない
- (2) 彼はもともと【 】などところがあるから、いちいち腹を立てていたら身がもたない。
 - ① 小意気
 - ② 下廻上
 - ③ 門外漢
 - ④ 偉丈夫
 - ⑤ 唐変木
- (3) こんな初歩的なミスをしてしまい、【 】の至りだ。
 - ① 厚顔
 - ② 雪辱
 - ③ 感涙
 - ④ 汗顔
 - ⑤ 紅顔

27

26

問三

故事成語やことわざ、慣用表現を用いた(1)～(5)の文の空所に入る語句として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。

28 32

(1) 彼女は師である父親に憧れてこの道に入ったが、真摯に芸事に向き合ううちに、いつの間にか師を追い越したようだ。まさに「青は□より出でて□より青し」だなあ。(二つの□には同じ言葉が入る)

- ① 空 ② 海 ③ 水 ④ 瑠璃 ⑤ 藍

28

(2) 彼は小心者で一人では決して意見を言わないが、あの有名な父親と一緒にいる時は、まるで「□」のように威張り散らしているらしい。

29

- ① 知音 ② 愚公山を移す ③ 南柯の夢

④ 虎の威を借る狐 ⑤ 桃李もの言わざれども下自ずから蹊を成す

(3) この困難な局面を乗り切るには、□併せのむ器量が必要だ。

30

- ① 白黒 ② 首尾 ③ 攻守 ④ 動静 ⑤ 清濁

(4) 大一番の試合に勝利し、思わず□を叫ぶ。

31

- ① 感銘 ② 快哉 ③ 気概 ④ 喝采 ⑤ 心血

(5) どんな難事件も、彼が□を断つようにあっという間に解決してくれるはずだ。

32

- ① 快刀乱麻 ② 隱忍自重 ③ 断末魔 ④ 一意専心 ⑤ 氣宇壮大

問四

(1)～(3)の傍線部(a)～(c)について、表記または言葉の使い方の正誤の説明として最も適切なものを、それぞれ①～⑧の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。

33

35

(1) 監査委員の来社は予想外で、利不尽なことであったが、彼は経験豊富なベテランらしく、鷹様な態度で彼らを出迎え、見事に対応した。

33

- ① (a) だけが誤り ② (b) だけが誤り ③ (c) だけが誤り
④ (a) と (b) が誤り ⑤ (a) と (c) が誤り ⑥ (b) と (c) が誤り
⑦ (a) と (b) と (c) が誤り ⑧ 誤りはない

(2) 祖父の容体は余断を許さない状態だが、一時小康を得ている。

34

- ① (a) だけが誤り ② (b) だけが誤り ③ (c) だけが誤り
④ (a) と (b) が誤り ⑤ (a) と (c) が誤り ⑥ (b) と (c) が誤り
⑦ (a) と (b) と (c) が誤り ⑧ 誤りはない

(3) 彼女は入社以来、粉骨砕心の努力を重ねてきたが、その甲斐あって、希望の部署に転属することができた。

35

- ① (a) だけが誤り ② (b) だけが誤り ③ (c) だけが誤り
④ (a) と (b) が誤り ⑤ (a) と (c) が誤り ⑥ (b) と (c) が誤り
⑦ (a) と (b) と (c) が誤り ⑧ 誤りはない